



アフリカ都市で身体的機能障害をもち生活するとい
うこと : 非制度的都市空間と身体障害者の生
(【ワークショップ報告 第5回】2023年1月23日
(月))

仲尾, 友貴恵

(Citation)

21世紀倫理創成研究, 16:42-48

(Issue Date)

2023-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482782>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482782>



【ワークショップ報告 第5回】
2023年1月23日（月）

アフリカ都市で身体的機能障害をもち生活するということ： 非制度的都市空間と身体障害者の生

仲尾 友貴恵

日本学術振興会特別研究員 PD（国立民族学博物館）

本報告は顕在的な四肢障害を持つ人々がダルエスサラームで障害を持って生きることや「物乞い」をすることについて論じるものである。以下では、適宜、提題者の著書『不揃いな身体でアフリカを生きる——障害と物乞いの都市エスノグラフィ』を参照しつつ、発表とスライドの内容に基づき、報告の内容を要約する。

本報告は1. ダルエスサラームの雰囲気、2. 『不揃い』の問題設定、3. 都市的生活——移住し、稼ぎ、人と繋がる（生活記述部分）、4. 植民地主義と「障害者」の構築（歴史記述部分）、5. 結論の要約という五つの部分から構成される。そのなかでもメインとなるのは、3. 都市的生活——移住し、稼ぎ、人と繋がる（生活記述部分）の内容である。著書の構成は次の通りである。

序章「当たり前」に目を向ける——現代アフリカ都市における不揃いな身体

第一部 植民地主義と「障害者」の構築

第1章 「障害者」と近代、世界

第2章 イギリス領タンガニーカ行政にとっての「障害」概念

第3章 「肢体障害者」と「アルビノ」の出現

第二部 都市的生活——移住し、稼ぎ、人と繋がる

第4章 ダルエスサラームでの対人調査概要

第5章 都市移住、家庭関係、ケアへのアクセス

第6章 親族に頼らない、頼れない移住

第7章 物乞いに支えられる家計と従事者の葛藤

第 8 章 他人を身内に——持続的関係を創る相互行為としての物乞い
終章「彼ら」と「私たち」の境界はどこにあるか

まず、序章では主に問題設定がなされる。次に、第一部は歴史記述であり、主にマクロな視点で歴史的背景を紹介し、「障害」という概念を歴史的に考察する。第二部は主にフィールドワークで現地の人々と交流したり、観察したり、ミクロな生活の事例によって、都市移住と「物乞い」について研究するものである。終章は結論である。

1. ダルエスサラームの雰囲気

ダルエスサラームは、タンザニア連合共和国のなかで人口が最も多い都市（総人口 538 万人、10 年で 23% 増）である。そして、提題者は都市の中心部、海沿いの風景、食べ物（ウガリ、チャパティ、ピラウなど）、宗教（キリスト教とイスラム教とその他）、近代化が進んでいる状況、住まい（長屋暮らし：近隣住民との生活空間の重なり、共有空間での日常的な目配り、声掛けなどの特徴がある）からダルエスサラームの雰囲気を紹介している。

2. 『不揃い』の問題設定

提題者は、次のように問題を設定している。すなわち、福祉国家的社会では「自力で生活基盤を築くのは難しいとされる人」は、制度的福祉がない社会でどう生活しているか、様々な（不揃いな）身体の人々が生活しているアフリカ都市とは、どのような社会なのか、そして、そこから私たちの世界を相対化し、新たな展望を拓く観点は得られないだろうか、こうした問いである。

こうした問いの背景については二点に分けられる。まず、（1）障害学的転換とアフリカ地域研究についてである。「障害」というものから社会を見ることを切り口とする研究は古いものではなく、1970 年代以降の障害学的転換から、「障害」は社会的なものであり、そこから社会全体を問えるものになった。そして、1990 年代後半以降には、アフリカ地域における障害（者）を問う研究の分業が起きた。すなわち、村落における生活の場の混淆的状态に関する研究と都市における障害者性ゆえに関与する組織に着目した研究である。こうした研究のなかで、結果的に、「非障害者と混淆している個（ネットワークにおけるハブ）」という像

**アフリカ都市で身体的機能障害をもち生活するということ：
非制度的都市空間と身体障害者の生**

が都市における障害（者）研究では軽視されてきたのである。

もう一つの背景は、(2) アフリカ都市民像と「障害者」像とのギャップである。アフリカ都市民像として、特定の組織の中に安住しないこと、即興的で柔軟な対面的交渉を駆使してその場を切り抜けること、常に複数の選択肢の間を跳ね回ることというような像が描かれた。それに対して、アフリカ都市の障害者の生活は、特定の組織の内側に収まりきるものではなく、個人ネットワークのハブとして捉えるべきである。そのため、提題者は、生業（成人が生きてするために必要な物資を得る過程）に着目し、「顕在的「欠損」保有者」であるアフリカ都市民の生存基盤に関する研究を行う。

3. 都市的生活——移住し、稼ぎ、人と繋がる（生活記述部分）

第二部は主に 2010 年代ダルエスサラームにおける顕在的「欠損」保有者の生活とはどのようなものかという問題をめぐって研究する。提題者によれば、生活者の生活を記述する際、次のような課題に直面することになる。

まず、(1) 理解不可能性と相互理解の可能性、その狭間に立つことはできるかという課題である。次に、(2) 特定の観点から見てある程度妥当な像でありつつも、例えば、「唯一の正しいストーリー」に功罪があるように、回収しきることができない事柄を書く（捉えきれない豊かさを書く）ことができるかという課題である。さらに、(3) この日本社会で誰しもに開かれた問題として提示することである。例えば、ポスト・ハンセン病対策、ポスト・やまゆり園事件の問題や、いかに読者に想像力を喚起するかといった課題である。

次に、提題者はこの著書における主な登場人物を紹介している。132、133 ページで紹介されている図によれば、提題者が出会った時点で、物乞いをしていた人でも、それ以前に様々な職業（経済活動）に従事していた時期があることが分かる。

「物乞い」とは、「明らかに扶養義務を負わない関係にある人（例：通行人等）から明確な対価なしにモノや金銭を得る行為」である。これは提題者が便宜的に用いる用語であるが、「物乞い」をする人のスワヒリ語名称としては ombaomba や mwombaji 等がある。従事者は必ずしもこれらの名称の使用を好まず、多くの場合は忌避的である。「物乞い」をする本人らは「仕事 kazi」、「座る -kaa」、「得る -pata」等の表現を使う。

そして、著書の第 5、6 章では主に都市移住に関わる内容を紹介し、「なぜ、

どのように都市にやってきて、どのように生活しているか」という問いを検討する。第 5 章では親族を伴って移住する人を研究対象とし、第 6 章では親族が間に入っていない人を研究対象とする。

第 5 章の課題は親族を介した都市移住の事例を、社会関係（の変化）といった「ミクロな事情」に着眼して提示・検討することである。これに関して、三人の具体例を取り上げる。

- (1) ルーク (31 歳男性、アルビニズム、清掃会社経営) の場合は、親族などから支援を受けつつ就学、知識と人脈を活かしてキャリア形成を行う。
- (2) メリ (36 歳女性、先天性内反足、縫製店自営) の場合は、同郷出身者集住地で民族紐帯や教会コミュニティという基盤があり、村の親族との繋がりがあある。
- (3) クリス (40 歳男性、四肢切断、物乞い) の場合は、5 人世帯 (妻 35 歳、長男 9 歳、長女 6 歳、次女 0 歳) で、親族への居候を数ヶ月で止め、転居した。妻は行商をしており、その後妊娠した。クリスは物乞い (兼通院)・買い出し・送迎をしている。

第 6 章においては、移住する時に頼れる親族がいなかった場合の状況を紹介している。第 6 章における問いは、「なぜ、どのように親族を介さず都市にきたのか？いかに生計基盤を立ち上げたか？家族関係はどのようなものか？」という問いである。本章は「親族を介さない移住」（これまでの都市移住研究では周縁的）をした肢体不自由者たちの事例から、顕在的「欠損」保有者の移住と家族関係について検討する。また、日本において定位家族や施設に生活の場を封じられてきた「障害者」の「脱家族」や「自立生活」との類似性を分析する。これに関して、下記に三人の具体例を取り上げる。

- (1) アハマド (61 歳男性、移住から 38 年) は、4、5 人家族の大黒柱であり、様々な路上仕事の後、物乞いに 15 年専従している。
- (2) フィリップ (32 歳男性、ダル移住から 3 年未満) は、独居して物乞いに専従している。ナイロビは生活圏である。
- (3) ザハラ (36 歳女性、移住から 10 年) は、シングルマザー、セルフ・ヘルプ・グループ会員であり、露天商と物乞いに従事している。

そのなかで、男性のアハマドとフィリップはともに、パートナーとの仲違いを契機に、村落に妻子を残し、先行する物乞い従事者（同性）を頼りにしている。

アフリカ都市で身体的機能障害をもち生活するということ：
非制度的都市空間と身体障害者の生

アハマドは望郷の話を語った。例えば、「もう街は疲れたから、村に帰ってそこに埋まりたい」、「年寄りを見送りたい」、「帰ったら、みんなに沢山服をあげたい」などである。他方、フィリップは、例えば、「自活できない人（watu ambao siyo jiweza）の子どもを勉強させる場所、まさにそういうところを探している」と語りつつ、「最新型の iPod…15,000 ケニアシリング〔約 17,000 円〕で買えると聞いた。金は用意するから」など稼ぎと消費について語った。

提題者はケニアのルシア人「出稼ぎ民」的語りと、アフリカ出稼ぎ民の語りには重なるところがあると考えている。村から出て町に出稼ぎにきた男性たちは都市を「偽の」、「働くだけの」場として語って、それに対して、『『本当の自分』の居場所』として村を位置づける。実際には彼らが所属する村は存在しない。これは出稼ぎ民が「よりうまく生きるための精神世界の避難所として、便宜的に想像され活用される」語りの形なのである。この点で「物乞い」をする者の語りと似ているのである。

女性の語りは、日本の「脱家族」的語りとの重なるところがある。ザハラの語りによれば、自分をケアする人々に押し込められる息苦しさが現れた。ザハラはある意味で「脱家族」の生活をしており、極貧のなかで貯金して数年に一度帰村し、村の人を連れてきて居候させつつ都市生活のスタートを支援する。そのなかで、「障害者」としてのアイデンティティと自分が都市に住んでいる立場を持つことによって、「都市先住者」として振る舞う。そして、先行移住者の存在は生計基盤を安定させる。これらの例によれば、村から都市に移住することは、場所が変わるだけではなく、新たな社会的アイデンティティを獲得し、新しい社会関係を得ることなのである。

第7章は「物乞いに支えられる家計と従事者の葛藤」をテーマとし、「物乞い」を外から捉えて「物乞い」によって何が生まれているかを論じるものである。具体的には「物乞いは実際にどの程度稼げるのか?」、「物乞いをしていることを当人らはどのように捉えているのか?」を考察し、物乞いが「生活を支える仕事」として、どのような位置づけにあるかについての事例を提示・検討する。すなわち、その生計活動としての生産性（どの程度の世帯消費を可能にするのか）とその社会的威信（物乞いについて従事者たちはどのような態度を示すのか、それはなぜなのか）を検討するのである。

「物乞い」をする者から「家族には隠したい」、「止めたい」と語られることが

ある。物乞いをする者は提題者に、妻の前で自分が「物乞い（ombaomba）をしている」と言わずに、ただ「仕事をしている」（“Anafanya kazi”）と言ってほしいと語ったことがあり、家族には「物乞い」について隠そうとすることがあった。また、物乞い従事者たちには、「できれば止めたい」と語りつつ、新しい仕事に従事しても、その仕事を他の人に担わせて、自身は物乞いを続けている人も多く、「止めたい」という語りとは矛盾する実態もある。

また、物乞いで「得た -pata」金と、無心に応じてもらった「貸し付け -kopeshwa」金には違いがある。後者は、返済の義務を遂行することによって貸し手から以前より信用されるようになるなど、借金とその返済を通じての関係性の変化とそれに対する喜びが語りに表れていた。

さらに、物乞いに参与することで痛みを感じる、ジェームズ（3年前に失明、23 歳）の例がある。彼は、長い時間をかけて意味のあることをしようと努力したが叶わなかったと語る。妻のジュリアは、「助けてもらって成り立ってきた生活である」と物乞いによって生活が維持されていると語った。ジェームズにとって物乞いは単に苦悩と停滞の結果であり、また行き止まりの状態なのである。

上記のいくつかの例によれば、物乞いは他者との複数の異なる関係性の中に位置づけられるゆえに、倫理的葛藤を生むことが分かった。

4. 植民地主義と「障害者」の構築（歴史記述部分）

タンザニアでは、なぜ公的な保障がないのか、なぜ障害者が障害者として含まれていないのかが問われ、その背景として植民地主義などの影響が検討される。

5. 結論の要約

提題者は、以上の内容から示される事柄を次の 2 点にまとめている。（1）ダルエスサラームで生きる顕在的「欠損」保有者の生存は、「いま・ここ」に依拠するものである。そして、提題者は対面で構築する社会関係の重要性を次のように指摘した。「生活基盤の構築可能性がごく微細な対面的パフォーマンスに依拠した空間であり、人々が対面的に行う微細な振舞いによって、何か——即時的な社会関係、即時的に授受される物質、信頼、身内的関係など——が生み出される」（『不揃いな身体でアフリカを生きる——障害と物乞いの都市エスノグラフィ』 p.283 より引用）。さらに、前景化する指標の多様性については、「その人柄、関係性、

アフリカ都市で身体的機能障害をもち生活すること：
非制度的都市空間と身体障害者の生

仕事ぶり、家族内での立場、所作等、その時々で前景化する様々な指標によって周囲の人々から判断され、関係を取り結ばれている」(同上 p.282 より引用)と述べる。提題者によれば、「欠損」は相互行為を切り開く意味で資源となりうる。差異はカテゴリー化されるものであるが、基準が決められないので、不安定であり、自由な面もある。また、「記号」(抽象・単純・普遍)と「顔」(具体・固有)というような言葉を用いて、普遍性だけではなく、個別性の可能性をも提示した。

もう一つの点として、提題者は、(2)大都市だが、非人間化(制度化)されていない空間が存在する原因について、誰しも生きるために必要なものはそれほど変わらないという生活の論理と、植民地経験に根差す公権力には頼れないという感覚から分析した。

(李倩 要約)